# 開発に燃えた青年隊が60周年＝記念大会に国内外から164人＝再会に笑み「５年後に会おう」


祝 南米産業開発青年隊60周年大
60 Anos de Nambei Sangyo Kaihatsu Seinentai
(1956-20

60周年を祝った関係者ら

南米開発の夢に燃えた青年たちが、ブラジルの大地に第一歩を印してから６０年一。南米産業開発青年隊協会（渡邉進会長）は先月２９、３０両日、サンパウロ州郊外アヴァレー郡にあるアクァヴィレ・ホテルで、『６０周年記念大会』を開催した。遠くは日本やポルトガルからも元青年隊員が駆けつけ、その家族ら１６４人で盛大に行われた。

青年隊は、農家の二、三男を技能者として養成し、戦後復興のために役立てようと建設省により作られた制度。当時事務官であった長沢亮太氏らが奔走し、ブラジルへ送り込まれた３２６人の青年隊員は、農業を始め建設、通信、測量等の分野で国土開発に貢献した。

同協会は、移住２０年目の７６年から５年おきに式典を行ない、今回で９回目。２９日昼過ぎにサンパウロ市からのバスが到着すると、旧友との再会に胸を躍らせて待ち侘びていたパラナからの元隊員らと固く手を取り合い、互いの健勝ぶりを喜んだ。

同日午後４時から記念大会へ。慰霊祭では、静岡県富士宮市にある興徳寺の住職である松永泰然僧侶が導師を務めた。先立った長沢氏や１１１人の仲間に黙祷を捧げ、焼香。続いて高らかな隊歌合唱が式典の開始を告げた。

挨拶に立った渡邉会長は、５６年に渡伯した１７人の第一陣に始まる同隊の歴史を振り返り、「近代化の国家的事業の第一線で大きな成果を挙げてきた。青年隊移住者としての責任を果たしたのではないか」と称え、「１１１人の友に思いを馳せ、昔を懐かしみ、未来を夢見る楽しい一日にしたい」と挨拶。

□□□